

IV.村井純 発起人代表(フォーラム委員長)挨拶:「フォーラム設立に当たって」

皆様こんにちは。慶應義塾大学の村井です。

本日は、スマートプラットフォーム・フォーラムの活動のスタートにお越しいただき、ありがとうございます。「スマートプラットフォーム」について、経緯、概念、そして今なぜこの話が大事であるかについて、ご説明していきたいと思えます。

ご覧頂いているスライド(図 1)にはいくつかのことを書いてあります。

日本の政策課題は沢山ございますが、特に、大きくグローバルな課題で ICT が貢献しています。IT 戦略はもちろんですが、

医療、農業、教育領域が挙げられます。同様に、他領域の政策においても ICT は貢献できなくてはいけないのですが、一方で難しい点があります。たとえば、技術は突出していいこともあるのですが、応用・コンテンツ・人間に対する貢献となると既存との整合でスローダウンしていることがあ

- 「成長戦略」「日本再興」「超高齢社会」「グローバルリーダー」「セキュリティ」
 - 大きく、グローバルな課題。ICTは貢献する。
- 「医療」「農業」「教育」「文化」「交通」「環境」「エネルギー」「金融」「行政」
 - すべて既得権が宿る！ ICTは貢献する。
- 「民主導」から、「マルチステークホルダーに」
 - 国民の責任、家庭の責任、コミュニティの責任、地方の責任、中小企業の責任、ベンチャーの責任、大企業の責任、国の責任 ICTは貢献する。
 - ICTはマルチステークホルダーで推進する。
- インターネットは速い。LTEは普及している。4Kが始まる。個人がパワーアップ。
 - 日本が世界に貢献する。
- 研究と教育と研究教育国際基盤
 - 優れた人材が日本に集う

図 1 「はじめに」

ります。この点で、他の国と比べて日本は ICT の進歩が遅いということが言われます。しかしながら、あらゆる領域でデジタルテクノロジーは貢献していかななくてはならない。この点が一つのポイントとなります。

2000 年頃から、「民主導」ということが言われました。「民がやることなのだから国は口を挟まない」、という風に、官から言わせると「民間にまかせていることだから私には責任がありません」という風潮がありました。しかし、実際にはこれは双方に責任があるでしょう。そのことがもう一つのポイントとなります。

参加という点では、今後、ますます個人が大きな力を持ってきます。たとえばコンテンツ流通では、参加者である個人あるいはコンテンツのクリエイターが、プラットフォームを考えることができ、それが重要になります。つまり、ICT では、民とか官とかではなく、関わる全員の参加責任を考えていかなければいけないわけです。したがって、デジタル時代の社会基盤、プラットフォームのあり方は、誰の責任でどこをどうやってやるのかというモデルが大きく変化します。そういう意味で、新しい領域では新しい考え方で議論が必要となってまいります。これがスマートプラットフォームに繋がります。

技術の発展や社会への浸透という点では、インターネットが速いとか、4K テレビ放送が始まるとか、どれをとっても日本は世界をリードしていくのだろうと思うわけです。これは日本が世界に貢献していくことに他ならなりません。もともとインターネットは国境がないのですから。そのために、必

要な知見をきちっとやっていかなければなりません。研究や教育とはそういうことであります。子供たちの環境はこれで大丈夫なのか、小学校の教育はこれでいいのか、プラットフォームというのは、そこまで考えなくてはいけないのではないのでしょうか？ 私は、このフォーラムでは、そういうことも議論の対象としていいのではないかと考えています。日本のいまどきの大学は、日本人だけ教育するものではありません。世界中の優れた人材を育てるといふことになると、日本に集うことが大事となり、日本人も世界で活躍することになります。環境としては、デジタル時代はとんでもないことが出来る時代となりますので、とんでもない貢献をしたいと思っております。その辺のところを「プラットフォーム」という言葉で呼び、議論して参りたいと考えております。そうすると、切口はデジタル環境で世界にどう貢献するかというアプローチが、いろんなインパクトを与えていくのだと思うわけです。

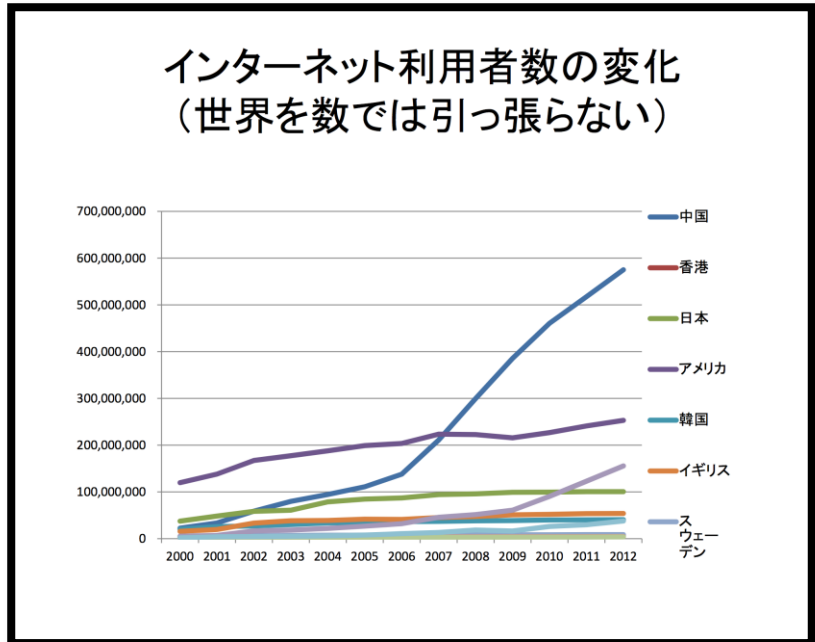


図 2 インターネット利用者数の変化

日本のグローバルな貢献という点で、注目しておきたい色んなデータがあります (エラー! 参照元が見つかりません)。一番左が 2000 年です。この時代、アメリカと日本だけを考えておけば、技術的にはグローバルに貢献できていました。「何で日本とアメリカでやっているのか？」といわれた時は、「マーケットドリブンだから」で済みました。しかし今、本質的な中身を考えると、2000 年の頃のようなマーケットドリブンというロジックだけではダメで、「グローバルにいいものを作らないといけない」ということになったことをぜひ理解いただきたいです。

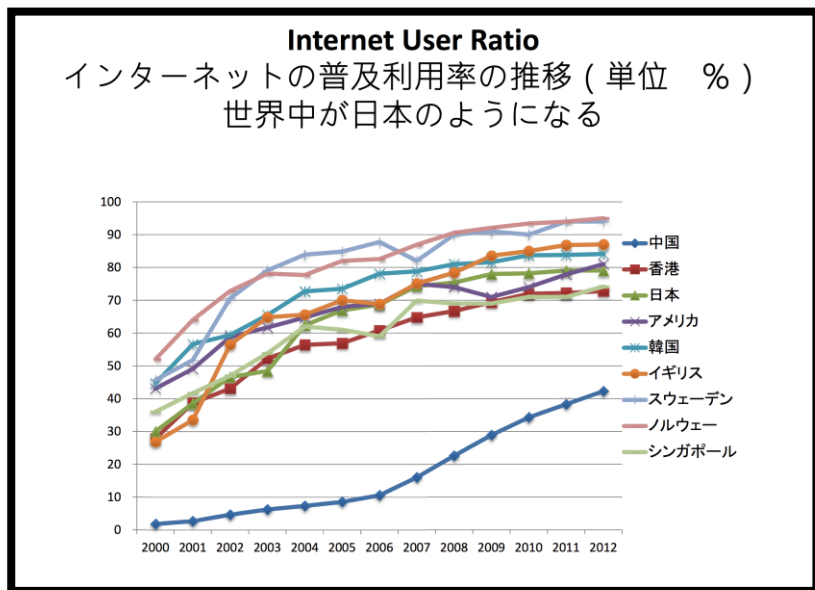


図 3 インターネット普及率の推移

ことを前提に議論が出来ます。一方で、現在の世界平均は 30% ぐらいで、中国は 40% となってい

ます。我々がここで議論するスマートなプラットフォームは、我が国の状況が基準になります。これがグローバルにどういうレベルで貢献できるのかと考えると、上位の国と同じように全ての人がインターネットやデジタルプラットフォームに参加できる時はいつかということが大事になってきます。これには、場合によって50年かかるという人もいますし、すぐではないかと答える人もいます。私は大変楽観的なので、すぐに楽観的なことを言うてしまうのですが、ここでお話ししたいのは新しいIT戦略を作った時のことです。東京オリンピックなども視野に、達成を2020年と予測しましたが、その目標値は絶対前倒しされると思うわけです。なぜなら、2000年に作った2005年に世界最先端のIT国家をつくるという目標は2003年で実現したからです。デジタルでは、広がれば広がるほどコストが安くなるので、結果的に予定が前倒しされます。特に、経済効果を見越せて、予算を立てて計画したものは前倒しされる傾向が強いと考えます。

人類の9割が、このデジタル社会に生きるのはどのくらいかかるのと言われれば、私は2020年には出来てしまうと考えます。そうだとすると、私たちの国が世界に貢献できる基盤を既に持っていること、そこでの課題をスマートプラットフォームという枠組みの中で解決をするということに着手をしていることは大きなアドバンテージと言っていいと思います。そしてさらに、そのことが全くあたらしい（デジタル時代における）個人の創造性、作家の創造性、そういったことを考えながら作っていかれると思うわけです。

後で稲蔭先生や、舟橋さん、南さんからお話いただけたらと思いますがそういった新しいデジタル化の時代に私たちが何をすべきかについては、やはり色々な知見を持った方と立派な議論が必要です。その結果として、これをどういう提案にしていくか、どういう力にしていくか、場合によっては規制やルールのある方を提案していく必要性がでてくるかも知れません。そういった意味で課題は多く、使命も大きく、そして時間はあまり待って欲しくない、というのが実際のところだと思います。

こういう状況を踏まえ、「スマートプラットフォーム」という言葉を使わせてもらいました。新しいデジタルデータの時代での、リーダーシップを、あるいは貢献を、どういう風に発揮し築いていくかを、考えるべきだということでもあります。

9月30日に慶應義塾大学でシンポジウムを行いました。いろんな視点、社会科学的視点、テレビ放送の視点、Webの視点、北海道・石狩でのデータセンターで環境と地球温暖化の視点から意見をいただき、パネルディスカッションでは、飛び入りで伊藤穰一さんにも参加していただき、未来をどうプロデュースできるのか前の段階の基礎議論を行い、宿題もいただきました。

私たちは、デジタル情報社会、そして世界と繋がっている日本の中でどういう役割が必要なのか、皆さんと議論したいと考えております。

以上、スマートプラットフォームについての使命感と私の思いを述べさせてもらいました。

(以上)